

大般若經字抄につきて

岡井 慎吾

本書は石山寺の經藏に傳はるのだが、私は京都帝國大學國語研究室に藏せられる鈔本を見るを得たから、之によつて述べる。原本は何れ粘葉綴でも有らうが、研究室のは普通の綴本となつて居る。長く年所を経て原本に不明な處も多いのか梵字など形を成さぬも有る。

大般若經は六百卷の巨帙ではあるが、般若は智慧なりで佛教思想の大なる源泉だから、夙に和銅五年の長屋王願經が存し、神護景雲元年の行信の願經、貞觀十三年の安倍小水磨の願經などと訪書餘錄に著録せられて居る。又降りては榮花物語日陰の卷にも「大般若經などの御讀經」と見えるから長き讀誦の間には其の音義も出たらうと想像せられる。彼の涅槃經音義が圓仁によつて作られたは安倍

の書寫よりも八年前だつた貞觀六年であり、孔雀經音義は延喜五年に寂した遍明の手に成り、法華經單字は保延二年に源實俊によりて書寫せられたより推すも如何に巨帙なりとは云へ誰か手を着けさうに有る。果せるかな此の字抄を成した用意を書中の第六十帙の末に

仍檢近代又(人の訛ならん)々所撰音義、或雖立篇(部首の義ならん)詳聲搜所在之間早難轉讀、或雖經帙指卷案反音之處自致停滯(點は今加へた)

と述べたのを見ると、音義として部首別のと卷の順ながら反切を用ひたのとが既に存したのを知られるから大般若經にも其の種のが出て居たらうが、今日は著録せられた物を見ず、假名字體沿革史料にも引かず、訪書餘錄にも「南

北朝又は足利時代の初期」といふ大般若經音義を出すに止まるから、本書は空谷の梵音とも云はれる。

本書には長元五年、長寛二年と有る。長元五は後一條の御宇(皇紀一六九二)で御堂關白薨去の、長寛二は二條の御宇(二八二四)で平治の亂の、何れも六年後で、其の間は百三十年餘を隔てる。又涅槃經音義の出た貞觀六年よりも三百年も後だから前項に云つた様な物が介在したのだらう。本書は卷の順に文字を出し之に直音を附するを其の新機構としたらしいが、直音のみでは無い。其の文字の取り方を亦第六十軌の末にて

今任_レ卷軸之次_二注以_二漢吳二音相同之字_一、雖_二其音不_レ違_二至于淺智不_レ遍知_二之字_一不_レ敢用_レ之、偏依_二吳音_一別載_二載_二正音_一或以_二假名_一注_レ之、不_レ顧_二碩學之相朝_一嘲か唯欲_二瑣才之易_レ讀者也(同上)

と述べて居るから、漢吳二音相同の字を取つたが其の目的は吳音を明かすに有つた。別載正音とは

正樂音堯 正聲音巾 正瑕音計 正掉音逃
孝樂音堯 觀聲音巾 河瑕音計 趙掉音逃
では吳音の濁れるに對して清めるか又は音の異なる漢音

大般若經字抄につきて

を指すらしいが

正貯音儲 正榮音永 正顛音小 正斬音多

では然うも云はれぬ。或以_二假名_一注_レ之は訓を云ふのだらう。音を假名で示したは梵語の五處九字に止まるから。さて訓として用ひられた國語の假名遣は既に頗る亂れて居るが

蹠ツフシ 肺フク／＼シ 拱テウ(ヲ)タス(ム)タク

叱イサフ 傲アナヅル 窶モタヒ

など言海に古言とせるを用ひ、又

濡 沾ウルフ 鎔トロモス 潰ツユ 誘ス、ム

なども新しからぬ國語だらう。之に用ひられた假名にも

古體が存する。

一キ 今ケ セサ 寸ス 𠂔ホ アミ

ユユ 禾(ノ)ワ 𠂔ン(キサスユも混用)

字音は直音を常とするが

魁 殯 潰 塊火以 蛻下以 猥禾以又和以 藕五宇

には二字を用ひ、又時には音の首の一字を註せるかと思はるゝも有る。

机五 冒暮 諒里

里は量の筆誤とも云はれるが他の二字にはさる餘地も無い。音註の文字には誤れるらしきも多いが、左の六條の
 繫習 炷 注趣 狎甲 彫周 炙アブル 腕宛
 は百姓讀だらう。

蝸倭

は神武紀の怡禁過の注に過音倭とあるの傍證とすべきか、
 蝸過ともに韻鏡にて牙音清行の字である。

腕案 咄脫 斟案

にはさる由ありとも見えぬ。本書にて特に注意すべきは
 舌内唇音の二を明かに區別して居る事だ。

跟根 咽縁 涎泉 領惑 瞻湛 瘞淡

入聲のフ韻も正しく當てられて居るが、時には意外の誤字
 も有るから注意を要する、例へば

懶音出 メクス 耐音出 メクム

上の、訓もメクムで懶耐は恤卹の訛。

第六十帙の末に又

法相宗學從徒か勘進卅餘所闕文、并或音義疑_ニ疑か脱落_ニ
 稍異本之文等於_ニ有_レ證者_ニ皆以注附俟_ニ來哲之取捨_ニ（同
 上）とありて經文の異同が條舉せられて居る。其等の文が

今日いかに結着して居るかは私の知る所で無いが、書寫相
 傳の時代には已むを得ぬ事だらう。興福寺、圓成寺、山階に
 傳はれる唐本の外に或唐本といふのが有り、栖霞寺摺本と
 わざわざ有るは他の唐本は寫本にや、且つ普門寺、南圓堂
 の本をも引けるなど經文の考定には多大の注意を拂つた
 が知られる。

註に引用したのは玉篇、廣益玉篇、切韻、蔣勣（勣とのみ
 もあり）、薩峴、王仁（熙脫か）、玄應、字書、或音義の九種だ
 が、廣益玉篇の二條も今の大廣益本とは合はぬ。

第四十帙第十の 筵篋（或筵篋云々然而依_下度_ニ高麗_ニ物_上不_レ用_ニ吳音_ニ）はいかなる意だらう。釋名に空國之候所_レ存也
 樂府雜錄に故號_ニ空國之候_ニと有るによつて一方は空候と
 有るべきだらう。或は又本朝格に見ゆる箠篋を筵篋の異體
 と見たのかも知れぬ、那波本には筵篋、箠篋兩條ともに俗
 云_ニ空古_ニと有るから。さて筵篋二字の讀のクゴたること譌
 曲羽衣にも傳へられるが、古は倭名抄に空候_ニ二音俗如_ニ江
 湖_ニ二音_ニと云へる如くコウコノ音だつたから不_レ用_ニ吳音_ニ
 とことわつたのか。果して然らば此の訓は倭名抄への貴き
 一傍證と見られる。（昭和十一・十一・廿七）